

研究・調査報告書

報告書番号	担当
34	高崎健康福祉大学薬学部細胞生理化学研究室
題名 (原題/訳)	
Pregabalin in outpatient detoxification of subjects with mild-to-moderate alcohol withdrawal syndrome. 低・中等度のアルコール離脱症候群の外来患者の解毒におけるプレガバリンの効果	
執筆者	
Di Nicola M, Martinotti G, Tedeschi D, Frustaci A, Mazza M, Sarchiapone M, Pozzi G, Bria P, Janiri L.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Hum Psychopharmacol. 25(3): 268-275 (2010)	
キーワード	
アルコール依存症、外来患者の解毒、離脱症状、プレガバリン	
要旨	
目的： 本研究はオープン・前向き研究で、低・中等度のアルコール離脱症候群（AWS）を示すアルコール依存症の外来患者の解毒におけるプレガバリンの効果、医療的安全性、実行可能性について検討する。二次的評価項目は、（アルコールに対する）欲求の低下、心理的症状と生活の質の改善である。	
方法： 40人のアルコール依存症患者（DSM-IV）に200-450 mgのプレガバリンを（アルコール）解毒のため投与した。離脱症状のスケールはCIWA-Arを、欲求のスケールはVisual Analogue Scale、Obsessive and Compulsive Drinking Scaleを適用した。心理的症状と生活の質については、それぞれ、SCL-90-RとQL-Indexを使用して評価した。さらに、解毒処置後、再発した患者と禁酒している患者について比較した。	
結果： プレガバリン処置後も、アルコール離脱症状とアルコールに対する欲求は有意（ $P<0.001$ ）に継続して低下した。また、プレガバリンは心理的症状と生活の質での良好な改善をもたらした（ $P<0.001$ ）。	
結論： 本研究はプレガバリンの外来患者の解毒効果に関する初めてのオープン・前向き研究であり、プレガバリンは低・中等度のアルコール離脱症候群の患者の治療管理で効果的かつ安全であることを示している。	